

総合目録の問題点 (I)  
Union Catalogs and Their Problems (I)

中 村 初 雄  
*Hatsuo Nakamura*

*Résumé*

The writer of this article contributed one of a series of articles six years ago entitled "Union catalogs; an initial survey of Japanese union catalogs" in *Toshokan-Zasshi* (Japanese Library Journal). It was soon followed by several other articles relating to the problems of union catalogs in Japan.

A survey conducted in 1959 on the use of union catalogs in public and college libraries by Mr. Kuroiwa was also published. Messrs. Kutsukake, Nishizawa and Yamasaki, as distinguished practitioners in this field, contributed much in their writings to the clarification of the idea and indication of the status of union catalogs in Japan and elsewhere. Recently Tokyo University Library began an enormous experiment to develop a union catalog covering the main library, branch and departmental libraries including those attached to many of the research institutes, etc. of the University. Preliminary steps for the compilation have been taken through microfilming of all cards of these libraries and reproducing of standard size cards from microfilmed images.

Although all these suggest very strong interests in union catalogs among Japanese librarians, the writer has some concern about whether or not the Japanese library world in general properly understands the functions of the union catalog.

It is remembered also that 21 years ago Mr. Mamiya wrote a comment, "Union catalog on parade," in *Toshokan-Kenkyu* (Library Research) in which he criticized very sharply the situation.

The writer tries to introduce modern definitions of the union catalog (mainly from the Unesco/Library of Congress Bibliographical Survey, 1950).

A union catalog in card-form, which is easily kept up-to-date, is our ultimate goal, rather than the printed union catalog in book-form. The latter is merely a fragment of the former and can cover only a limited period. Sections of the card-form may be published in book-form whenever the demand justifies it.

Also some concepts, such as the indexes of duplication, of inclusiveness, and of distinctiveness, are introduced for the purpose of calling to the attention of librarians the *raison d'être*: for what and for whom union catalogs are intended.

Some historical viewpoints and also historical union catalogs such as *Registrum librorum Angliae* and its Japanese counterpart, *Nihonkoku-Kenzaisho-Mokuroku* (Union list of Chinese materials in Japan), compiled by Sukeyo Fujiwara (died 898), and current union catalogs (Japanese and foreign) are also discussed in order to provide a general basis for further discussion of the problems in Japan.

(Japan Library School)

まえがき

序 論

総合目録とは何か 定義のこころみ

総合目録の起源

総合目録の機能

総合目録の現状

## まえがき

## A. ことわりと回顧

6年前の図書館雑誌に“総合目録について”<sup>1)</sup>と題する拙稿が掲載されて以来、総合目録に関する諸論文が引き続き発表された。<sup>2)~4)</sup> 黒岩高明氏は意欲的な調査を開始し、“総合目録の利用に関する研究”<sup>5)</sup>を発表した。最新の例としては、本年2月号の図書館雑誌に紹介された東京大学附属図書館の画期的な実験“総合目録の作成——その過程”をあげることができる。かくの如く少なからぬ研究・調査・評論が発表されている事実は、総合目録の意義に対する認識の高まりを示す証左として、大いに歓迎すべきことのように思われる。しかしながらその反面において、総合目録がその本質からかけ離れた単なる行政的業績の道具として利用されているのではあるまいかと憂慮される事態も生じている。好意的に解釈すれば、予算獲得の方便として利用したことが誘い水となり、結果的には総合目録のその後の改善・発展がもたらされたという例も皆無とはいえないであろう。しかしながら、我々としては社会の要求を満す最も経済的かつ効果的なものを求めるという正道を歩む努力を怠るべきではない。成功・失敗のいずれを問わず、内外の幾多の実例を分析解明し、過去の経験の中から総合目録のあるべき姿を追求することこそ、我々にとって最も大切なことではあるまいか。かかる意味において、6年後の今日再び総合目録の問題を本稿でとりあげることにした。

わが国において図書館間の協力とそれを具体的に裏づける総合目録の問題が識者間で論じられ始めたのは、かなり以前のことに属する。しかも単なる論議のみではなく、いくつかの総合目録が実際に編さんされ、刊行されている。にもかかわらず、今日に至ってもなお十年一日の如く、総合目録の重要性に対する認識の不足について議論を交さなければならないのは何故であろうか。また、現在する総合目録が活用されていないとすれば、それは一体何に起因するのであるか。これらの設問に答えることは必ずしも容易ではないが、一般的に指摘しうるのは、①編さん計画の不備、②目録規則の不備、③利用者側の怠慢の、3点であろう。

上述の3点から我々が何らかの教訓を汲みとりうると思えば、それは、すぐれた総合目録は一方向的・一面的な努力のみでは結実しないということ——換言すれば、編さん・刊行のための資金を提供する図書館理解者の善意があり、実際の仕事に携わる目録作業者の努力があろう

とも、能力ある人々の手によって維持・管理され、さらに好意と熱意に富んだ人々によって利用されるのでなければ、その機能は十二分に果されないということであろう。総合目録は、その字義の如く、まさに総合的な努力の結集にまたねばならない。異常な努力にもかかわらず、それが散発的なものであったが故に、成育を見ぬうちにその芽を摘みとられた実例が幾つかあることは、我々のよく知るところである。折角立派なものが編さんされたのにもかかわらず、多数の人に活用されるまでに至らず、他の似而非総合目録と共に時代の波に押し流されてしまった例も決して少なくなかったように思う。しかしながら、このような例はひとりわが国においてのみ見られるものではない。実情を無視した計画の故に、竜頭蛇尾に終わった例は、外国においても幾つか見られる。諸外国の実例を引き合いに出すことはたやすいが、しかし、ここでは問題の親近性を増す意味においても、わが国の例をとりあげたい。

以下に引用するのは、図書館研究 (vol. 15, no. 2, 1942. p. 187-188) 所載の“総合目録オンパレード”と題する論説である。執筆者の署名はないが、間宮不二雄氏の筆になったものと推測される。原文中の特殊漢字と発音どおりの仮名づかいは便宜上書きなおした。

## 総合目録オンパレード

文部省では大学図書館関係者に各大学所蔵文献の総合目録編さんを提案し、先頃集合した帝大図書館協議会で協議し、兎も角科学関係の定期刊物から着手することになった由。(因に學術振興会では昭和8年(?)に関係資料目録の改訂版が発行されている——岩波書店)

日協〔日本図書館協会〕の特殊図書館部会では洋書約150万冊(部長の意見であって、別段大した根拠ある数字ではないようだが)を目標として、あらゆる類の外国図書に総合目録編さんが決議された。その底本は部長の手で東京帝大附属図書館所蔵のものによって作られ、それを各参加館に廻し、所蔵のものには印を附し、補充するものはカードを附して返すと云うのである。尚参加した人の話によれば、これは目下外国書入手困難の折柄例の複製図書を作る時の参考に使るのが目的の而かも重な一つだということである。

書誌学部会では貴重書の総合目録編さんが決議された。そして此部の貴重書に対する見解は洋書は含まれない、というのである。従而邦書、及中文書というこ

とになる訳である。

誠に旺なことであるが、誰がその仕事にあたるかといえ、図書館に働いている人々に課せられる仕事であろう。此の仕事は区役所等の仕事と異り臨時雇の所謂微用令で集められた如き者では不可能な仕事であると言つて図書館の現状は何処でも人員の不足が唱えられ、日々の現業さえ片付けるに追われて居るのであつて、到底余力の幾分でもを——而かも目録編成能力ある者は各館に於ける重要位置を占める人々である——他に振り向けることは不可能だとは、某帝大関係者の申条である。

言うは易く行は難し。如何にして人員不足の現状に於て、本業以外の而かも相当なる時間と労力を必要とする任務に従事させ得られるか。発案者、或は立案者には相当な考があることならんが、兎も角之が実施に当つては現業員に課せられる負担は更に増大されることであろう。同時にその完成には尠からざる危惧を伴うものである。一方に於て立案者、発案者が考える程、如斯文献に対し我が日本人が活用する能力ありや否やも実行に当つては考慮してよい点と思われる。つまり我が日本人の大部分はそれらの文献利用技能が甚だ未熟であると認められる多くの事例がある。もつとも之は相対的議論として、そのような便利なものが無かつたから今日まで夫等の利用技能に馴れなかつたという議論も成り立つてであろう。併し必要を認められれば、作られること請合で、必要を認められなければ出来ないのが、之又当然な訳で今日まで出なかつた理由は、何れが主か今更にとくまでもなき事明かのことと考える。但し複製本の参考用に用いるのであるなら自ら別問題である。

総合目録は是非必要なものであることに異論はない。併し夫れは過重なる負担を強要して迄も作らねばならぬ程に活用され、効果をもたらし得るかどうか現状に於ては大なる疑問とする処なのである。活用と骨折との計量は別問題として、兎も角声のみに終ることなく一日も速かに現物完成が待たれる。

...

#### B. “一步後退二歩前進”の意味するもの

皮肉に満ちたこの引用文は、深い洞察力を持った経験豊かな図書館人らしい発言である。筆者は、21年前のものにかかわらず、この論を一つの卓見と見なし、現在においても同様の警告が発せられ、館界の深い反省を促が

すべきものと考えている。しかしながら、この発言は一部の図書館人の耳にはこころよく響かなかつたに相違ない。“我々に必要なのは前進である。何かをなすこと——それが重要なことである。理想的なものが最初から得られることは我々も期待してはいない。理想は実行の積み重ねによって初めて到来するものであり、実行がすべてに先行しなければならぬ”という考を固持する図書館人もいたであろう。それはそれとして実に立派な態度であり、わが国の図書館人一般が持つことを望まれる積極性ではあるが、我々の必要とする tool はこのような積極性だけでは作られるものではない。多角的な利用に堪えうる目録というものは、Margaret Mann の言の如く、一步後退二歩前進の繰返しによって作られるものであることを指摘しておきたい。

総合目録は、たとえその編成を終つたとしても、絶えざる反省を加えなければならない。それがどのように利用され、どの程度の満足を利用者に与えているかを調査することが肝要である。この調査は単なる調査にとどまるべきでなく、その結果は必ずその後の総合目録編成・編集の方法に反映されなければならないが、実情は必ずしもそうとはいえないようである。一例を以て全体を論断することは危険であり、避けねばならないが、以下に記す筆者の経験は総合目録に対する心構えにかかわる問題だけに、あえて紹介する次第である。

6年前に拙稿が図書館雑誌に発表された直後のことであるが、“総合目録なるものは果してどれほどの利用価値を持つものであろうか。現に某大学図書館蔵と記してあるので借用を申し込んだが、当館では所蔵せず、とあっさり断られた。”という不平を聞かされた。筆者も試みにその図書館について、2、3の点をチェックしてみたところ、その不平がまんざら不当ではないことが判明した。しかし、このような事態は戦災等によって惹起された避け難い不幸ではなからうか、と同情的に考えていたところ、偶然にもその総合目録の編さん者の口から真相を聞くことができたのである。その説明によると、問題の大学では標目のとり方が独自であるため、総合目録に記載されている標目で請求しても出てこないのは当然のことであつた。成程と一応はうなづけたが、筆者の気持には何か割り切れないものが残つた。

一体何を目的として総合目録を作成したのであろうか。相互貸借を促進する道具としてではなく、一冊の印刷物を刊行したという自己満足のためであらうか。それとも、次年度予算の獲得に備えた点数稼ぎにすぎないの

## 総合目録の問題点(I)

であろうか… 全参加館の標目のとり方を強制的に統一することは困難であろうが、標目上の相違に対して注意を喚起し、参照カードまたは副出カードを作成して利用の便を計ることを勧告すべきではなかろうか、と筆者が質問したところ、“やるにこしたことはないが、予算上の制約もあり、また総合目録は参加館に配布される以上、何が正式の標目として採用されているかは一目瞭然である。いやしくもカタログ―たる者は、その相違に注意を払わなければならない。”という返答を受けた。問答は以上で終わったが、彼の場合、目録編さんの重点は参加館目録系の教育・訓練にあるように受けとれた。果してこのような態度の中から、真に利用しやすい総合目録が生れてくるであろうか。編さん・刊行の真の動機が何であろうと、生産された総合目録が利用され、社会の要求を満してくれるものであれば、我々は満足である。問題は、使えない総合目録が莫大なエネルギーを投入して生産され、そして次々に忘れさられることにある。

### C. 一つの実験報告

総合目録編さんの実務に当り、その体験から問題点をあげている沓掛伊佐吉氏の論文について述べてみたい。

県立金沢文庫、大倉山精神文化研究所、および8市立図書館の10館が共同し、たとえ建物はなくとも、神奈川県において中央図書館の機能だけでも果すものを持ちたいという願望のもとに、昭和24年10月から総合目録の編さんを開始した。その成果は神奈川県主要図書館総合目録3冊となって刊行されたが、これは相互貸借の前提あるいは補助用具としてだけでなく、神奈川県立図書館設立運動の橋頭堡としてもその作成を計画されたものであった。昭和29年10月に神奈川県立図書館が設立されたので、総合目録編さんの目的の一は達成されたと見てよからう。沓掛氏はその間、ならびにその後神奈川県立図書館に転勤してからの経験を通して、次のように結論している。

1. 郷土資料とか特定主題に限定した総合目録ならば大いに有効である。

2. 創立期の古い図書館、あるいは現在入手の困難な資料を多数所蔵する図書館が参加している総合目録は有効である。

3. 創立期が浅く、蔵書も少ない図書館同志では、所蔵図書が大同小異となるので、あまり有意義とは思われない。

4. 参加館の一つが大きな図書館であり、他が小さ

な館であるときは、その大きな館の蔵書目録と化し、総合目録の意義が薄れる。

5. 総合目録を編さんする目的の一つは、相互貸借の前提となることにあるが、実際には相互貸借実施のための具体的措置がとられていない。

氏は更に続けて総合目録の意義“各館の書庫深く潜在する書物の顕在化”を充分認識しつつも、“なんでも総合目録にすれば良い”という風潮に反省を求め、“総合目録編さんの目的を十分に検討して、単なる思いつきで始めてはならない。”と論じている。

“…そして現在最も必要とされるものは、特定主題に対するものや、刊行年代(明治以前、明治年間、大正年間等)の専門的な文献の総合目録であろう。

一般の図書で何処にもあり、そして容易に入手可能なものの総合目録の編さんに、大きな努力と経費をかけるよりも、むしろ各大学、研究所、県立、市立図書館等ではまず自館の蔵書冊子目録を刊行し、お互に交換する事が先決であり…”<sup>6)</sup>

## I. 序 論

### A. 総合目録とは何か? 定義のこころみ

筆者の用語辞典ではこの項目を3段階に分けて説明を与えた。第1段階では、最も根本的な条件は、それが2以上の図書館の蔵書目録であるということ;それは全分野にわたる網羅的な著者目録の場合もあれば、特殊な主題に限定された選択目録の場合もあり、資料の種類によって限定され編成されることもある、と説明している。第2段階では、中央図書館を中心にいくつかの衛星図書館、支部・分館をカバーした一般図書目録、基本目録も総合目録として使用され、かつみなされていることがあることを指摘している。第3段階では、ユネスコ/米国議会図書館の国際書誌調整会議の討議原案で用いられた定義を紹介しておいた。これは、ややともするとカード形式の総合目録が忘れられ、印刷冊子体の総合目録のみが論じられがちな傾向に対して注意を喚起しておきたかったからである。

“印刷出版されないのが普通で、カード形式のものであり、範囲を限定したのもあれば、限定しないものもある。これは決して完成するという性質のものではなく、即ち終極のあるというものではない。いついかなる時でも、参加図書館の現在現実の所蔵を反映すべく努めてい

き、編成されている目録である。”下点を付した部分は、換言すれば、カードを絶えず追加繰り込むことが可能であるが故に、カード形式は目録を up-to-date に保つのに最も適した形式であるといえよう。図書が廃棄・除籍された場合にはカードを除去することも容易である。これに反して、印刷冊子体形式の総合目録は、ある特定の時点における横断面を示すものにすぎないといえよう。勿論それに補遺を付加していくことは不可能ではない。現にそのようなものも刊行されているが、その実施には予想以上の困難が伴い、相当の物的援助がなければ挫折することが少なくない。なおこれについては本論でも触れるつもりである。

本稿においては筆者が総合目録というとき、それは基本的にはカード形式のものを意味している。印刷冊子体のものは、それが成長を停止した1時点における横断面にすぎないとしても、その複製に対する要望が強く、しかも多い場合に、初めて発行される性質のものである。同時にいくつかの記入が見られるという冊子体の特性を生かすべく、編さんの技術に数々の工夫が重ねられるとしても、印刷冊子体の総合目録はあくまでもカード形式のそれを便宜的に複製したものにすぎず、いわば代用品ともいべきものである。参加図書館の現在・現実の所蔵を反映すべく、絶えず繰り込みを行ない、常に up-to-dateness を保ちうる点にこそ、総合目録の本領があるはずである。

筆者はまた、総合目録を、図書館間の協力、特にその資料相互貸借を可能ならしめるための道具であると見ている。貸し出されもしない資料がある図書館に所蔵されていることが判ったとしても、それは無意味である、とは筆者がしばしば述べた意見である。もっとも、所在が判明したことが原因となり、利用希望者の熱意がついに図書館の門戸を開かせるのに成功したという事例も少くはないので、最近はあまりこういう意見を發表しないように控えている。

年々全世界で生産される出版物、図書館資料の量を思えば、一つの図書館が総ての要求に応ずるということもはや夢でしかありえない。ワシントンやモスコの図書館がいかに膨大な予算と施設を持ち、大量の資料を収集しているとしても、煙草に関する歴史的資料、切手コレクション、パピラス等特殊なものに関しては、各専門のコレクションに匹敵するものではない。たとえそれらをすべて購入することが財政的には可能であっても、すべての資料を1館に集めることが、効果的な利用を保

証するかどうかは疑わしい。

一ヶ所に世界頭脳を設立しようということは、かつては多くの図書館人、書誌学者たちの理想・目標であったであろうが、今日では単なる白昼夢にすぎない。運輸・通信技術の発達に地上の空間的距離のもつ意味を相対的に減少させている。従って、図書資料を一ヶ所に集めておくことの意義は薄らいだといえよう。たとえその意義が大いにあるとしても、激増の一路を辿る図書資料のすべてを一ヶ所に格納することは、不可能に近い。

新しい意味における世界頭脳とは、近代的な通信・伝達手段および複写技術とうまく連結した総合目録にほかならぬともいえよう。テレックスの費用などは、現在の段階では安いとはいえないが、普及に伴うコスト・ダウンが見込まれるので、国際間での利用も近い将来には容易となろう。現に、テレックスとマイクロフィッシュの組合わせによる国際的な図書館協力も説かれている。<sup>7)</sup>

## B. 総合目録の起源

定義は簡潔なものほどよいとされているから、前項の如き長文は定義としては不成功であるが、総合目録の概念をより明確化するためには、筆者はその歴史的背景、機能と目的、現在する総合目録の实例、全国書誌と全国総合目録の関係を論じていかなければならないと考えている。

前述した定義の最初に“2以上の図書館の目録”という説明があったが、この意味における総合目録の歴史はかなり古いものである。

藤原佐世(898年歿)が勅命を奉じて編したという「日本国見在書目録」は、当時の日本に存在していた漢籍の総合目録である。同目録に対しては、その構成に独創がなく、「隋書経籍志」の模倣にすぎず、また日本人の著作も混在している、との批判もあるが、この目録が後世に残した利益は測りしれないほどである。同目録およびその手本となった「隋書経籍志」(内容は広汎にわたり、むしろ芸文志とでも称すべきものといわれている)について、他日、入念な考証に基づく研究を發表すべきであると思うが、本稿の趣旨は総合目録の概念を明らかにすることにあるので、ここでは他の例をあげることにとどめたい。

「日本国見在書目録」に相当する西洋の総合目録は、約3世紀遅れて、英国における宗教団の図書館蔵書について作成された *Registrum Librorum Angliae* といえよう。

英国のある図書館人は次のようなことを述べている。

総合目録の問題点 (I)

共同目録作業ということが近時盛に述べられるようになってきた。それは全く結構なことである。しかしそれが、1901年に米国議会図書館が印刷カードや総合目録を始めた頃から漸く行なわれるようになったと思う人があるとすれば、大きな見当違いである。アメリカ図書館協会が設立された当初から計画の一つとして採用され、1882年に出版された Poole の *Index to Periodical Literature* は共同目録作業の成果の一つであったといえよう。

それに先立ち、C. C. Jewett は早くから共同目録作業について論じている。<sup>9)</sup>

しかしながら、英国におけるこの構想の発展はさらに古い。すなわち、おそらくフランススコ会派の僧たちによって編まれ、1250-1296の間に作成されたと思われる *Registrum* は、共同目録作業の大きな成果にはかならないと考えられる。この目録がよく利用されたということは、その後これを基礎にして *Tabulae Septem Custodiarum* や *Catalogus Scriptorum Ecclesiae* が作られたことから窺い知ることができる。<sup>9)</sup>

*Registrum* はまず 183 の寺院・僧院のリストで始まる。8 宗教管轄区には、たとえばロンドン管区は 1-19、サルスベリー管区 19-36、オックスフォード管区 37-63、ニューカッスルとスコットランド管区 149-167 というように寺院・僧院の番号が配当されている。このうち 100 と 104 は空番になっており、19 は重複して使用されている。また総合目録がある程度進行してから追加されたのであろう、110 のあとにはローマ数字で XIII-XXII と V と VI、129 のあとには XI と XII に相当する機関名がリストされている。念のため著名寺院の番号を紹介すると、ウエストミンスター 11、聖ポール 19、リンコルン大伽藍 130、ダーラム大伽藍 164、ペータースボロー 61 と 64 (オックスフォード管区とケンブリッジ管区の番号) となっている。

それに引続き、94人の著名著者の著作のタイトルと、そのコピーを所蔵している寺院・僧院の番号とが次の例の如くに書かれている。

Opera Seneca	
De Beneficiis	163, 99, 82, 92, 209
De Clementia	163, 99, 82, 119, 109
Tragedia	82

各タイトルの記入法は非常に簡潔であり、当時の一般の図書館目録(修道院などの一館目録)では、所蔵するコピーの装釘や状態を詳細に記述するのが普通であったことから、総合目録としての *Registrum* の第一義的機能は図書所在を明らかにすることにあったことが知られる。94名の著者はアルファベット順にあげられているわけではなく、また所蔵館も番号順に列挙されているわけではない。

*Tabulae Septem Custodiarum* は前者より年代が新しいものと推定されているが、著者は80人に限定されており、アルファベット順に記載されている。

*Catalogus Scriptorum Ecclesiae*<sup>10)</sup> はかの有名な John Boston of Bury (1410 年頃活躍) が編したものである。John Boston はベネディクト派<sup>11)</sup> の僧で、英全土をくまなく旅行した人のようである。彼は 大伽藍・修道院の図書館を調査して *Registrum* の拡大をはかった。著者は 673 人に、図書館は 195 に増加している。著者はアルファベット順に配列され、それぞれ伝記的記述を付されている。また各タイトルの識別を容易にするため、第一語と末語を書くといった工夫もこらされている。各図書館に付す識別番号は *Registrum* のものを踏襲してはいるが、例外もある。

図書館(寺院)	<i>Registrum</i> 番号	<i>Tabulae</i> 番号	<i>Catalogus</i> 番号
Newark	18	18	18
St. Paul's	19	22	19
Weverley	19	19	20
Leves	20	20	21
Chichester	22	21	22
Southwick	23	23	23

ヨーロッパ大陸にあつては、フランスの Gabriel Naudé (1600-1653) が 1627年にはすでに総合目録を提唱していたと伝えられている。

近代的な意味での国際的規模に思いを馳せたのは Cornelius Walford であったとみられる。1878 年に開かれた英国図書館協会第一回年次大会に際して、彼は次の如く発言している。“経験者ならば誰しも気づいていることではあるが、図書館が大きくなるにつれて、その蔵書がどの程度諸君の特定の目的に役立っているかを確かめることはますます困難となる。一国の文献がいかに豊富であっても、それが諸所に分散されているならば、学徒・研究者はきわめて限られた利益を得るにすぎない。

欠けているのは、一館の目録なのではなく——それでさえ、事故や気まぐれのためにある種の問題に関しては不備な場合も少なくない——一国の文献の正確な状況を簡単かつ有効に指示し、その所在場所を示す目録なのである。<sup>12)</sup> Walford が今日の科学の進歩、出版事情、図書館界の状況を見たら、おそらく“一国の文献の”とはいわずに“世界の文献の”といったであろう。彼はその1年前ロンドンで開催された第一回国際図書館員会議においても、英文献の総合目録の整備を提案している。彼の提案は直ちに実行に移されたわけではないが、英国図書館員の間に相当の議論をまきおこし、慎重な考慮が払われた。しかも彼は全国書誌に関して発言した Henry Stevens によって強力な支持を与えられたともいえる。

Stevens は写真書誌——書誌取引センターとでも題すべき提案を行なったのであるが、参考のため関係箇所を引用してみよう。

出版された書籍は、その大小・性格価値の如何にかかわらず、新生児と同様すべて登記される必要がある、というのが私の意見である。人口・書物のいづれに関しても、私はマルサス論者ではない。ある母親、ある著者の生んだものに対して、一体誰が裁判を行ない、この子、この本は生れるべきではなかったなどと宣告しうるものであろうか？ …

我々は、兵士や、法律家や、罪人についてはかなり立派な名簿を持っている。しかるに書物についてそのようなものを持っていないのは何故であろうか。書物には、役に立たぬもの、廃れ物が多いとでもいうのであろうか。否とすれば、一方は簡にかけられ、他方は然らずとは何故か？ …<sup>13), 14)</sup>

### C. 総合目録の機能

定義を下すことが困難であり、またそれを理解することが容易ではなくとも、それが何のために作られ、どのように使われているかを知ることによって、その意義を感じることができることも多い。<sup>15)</sup>

黒岩氏の論文は冒頭でその点を論じているので引用してみよう。

「図書」は読まなければ、その本質を失う。図書館を利用する人々は、何らかの目的をもって、ある主題の、あるいは特定の図書や資料を読むために又は見るために図書館を訪れる。されば、図書館とは、読まれるためにある図書や資料を体系的に用意

して、その利用者の要求を満足させるためにある文化的奉仕機関である。

従って、利用者が要求する図書・資料・文献を閲覧に供することが出来なければ、図書館の利用価値は減少することになる。ところが年々歳々出版される図書は膨大な数に昇り、わが国で年間に出版される図書だけでも2万6~7千種という数を示し、いかなる大図書館といえども、これら人間の文化遺産を凡て用意することは困難というより不可能事である。しかも人類文化の高度化・複雑化と共に図書の出版も又頻繁となってゆくであろう。他の新しいマス・メディアがいかに発達しても、コミュニケーションの内容保存の点で図書及びその他の印刷物ほど永続性・容易性・確実性のあるものはなからう。

このように一つの図書館が、その蔵書数をいかに誇ろうとも、一館でもってあらゆる分野のあらゆる資料の要求に応じることは不可能である。そこで各国図書館が蔵書構成に特性をもち、図書館網の形成によって図書館相互貸借が行なわれるようにすることが必要であり、その為の道具として総合目録が必要となって来る。<sup>16)</sup>

黒岩氏はさらに筆を続けて、筆者もかつて指摘した訳語の問題を掘りさげ、明快な考証を行っているが、今は紹介する余裕を持たない。

総合目録の主目的は何か、という点に関しては、筆者は、国立国会図書館在職中に Robert B. Downs 博士から受けた勧告<sup>17)</sup> を堅持したいと考えている。“調査研究に必要な図書はすべて、少なくともその1部は、必ずその所在を示し、さらにもし可能であるならば、各地に散在する同一図書の他のコピーの所在を示し、その利用を容易にすることにある。” 岡崎猛郎・阪田貞宜・久埜取吉氏等と苦心しながらこの勧告を訳したことが思い出される。この引用文の受けとり方はいろいろあろうが、筆者は次のように理解している。

ある特定の図書なり資料が、存在するかどうか、手に入るかどうか、それに接近できるかどうかを示すのが総合目録の第一義的な機能であり、他のコピーが何処と何処にあるかという第二第三の所在を示すことは、副次的な効能というべきである。複写技術が発達し、マイクロフィルムによる空輸などが可能な今日、特にその感が深い。

総合目録が計画的に作成されている合衆国で、unique

## 総合目録の問題点 (I)

title (参加館の中で唯一の館しか所蔵していない図書、すなわち、カードに所在記号が一つしかマークされていないもの) というものが重要視され、各館の評価をする際に重要な鍵とされていることから、"総合目録にとって第一義的に重要なことは、参加館に何が総体的にみて所蔵されているかを調べることにあり、重複するコピーの所在を調べることは第二義的なことである。" といひ得よう。<sup>18)</sup>

黒岩氏が勿論、総合目録が書誌として使われることも認め、またそれが重要なことは充分認識している。しかしながら、総合目録に書誌的な性格を要求しすぎることに無駄も指摘している。目録はまず本来の役目を果たすべしとの趣旨には筆者もまったく同感である。

### D. 総合目録の現状

1. Brummel 報告 総合目録の現状の概観を把握するために、国際図書館協会連盟 (IFLA) が出版した Brummel と Egger の調査を紹介しよう。<sup>19)</sup>

ドイツにおけるカード形式の総合目録としては12例があげられている。フランクフルトの総合目録以外はいずれも戦後のものである。その中で1956年に開始されたストットガルトにあるヴェルテンベルク・バーデン両州総合目録が430万タイトルにのぼっているのは感心させられる。アメリカの総合目録は、ワシントンの議会図書館にある全国総合目録が900万以上で、デンバー (1936年開始) のものが600万、シアトル (1940年開始) が380万といったところである。スイスの総合目録は1927年開始で200万、オランダは1920年以来で250万、ハンガリーは1924年からで250万、カナダが1950年からで400万といった数字である。わが国では国立国会図書館が1949年に始めたカード形式総合目録が唯一のもので、40万タイトルとなっている。

しかしながら、印刷冊子体総合目録となると、国立国会図書館、医学図書館協会その他から14種も出版されていることが紹介されている。"もてる国" または "文化に理解の深い国" という印象を諸外国の図書館人に与えかねないが、これについては、本稿の冒頭で論じたように、十分な反省が必要であろう。

他の国での変り種を拾ってみると、スペインでは1944年からインキュナブラだけのカード形式総合目録が作られ、現在1万2千タイトルに達しているという。フランスは、1953年以来、現在発行されている雑誌について2万5千タイトルの総合目録を編成している。オーストリ

ーは、1952年以来最近の外国の雑誌・逐次刊行物だけについて全国総合目録を作り、2万5千に達している。

2. 外国の総合目録 国立国会図書館整理部主任 司書山崎武雄氏<sup>20)</sup> は、「欧米の全国総合目録と本館」と題し、イギリス・フランス・ドイツ・オランダ・スイス・イタリー・ソ連・ポーランド・ユーゴ・チェコ・カナダ・アメリカにおける実状を紹介した上で、日本の全国総合目録はいかなる道を進むべきかを示唆している。1948年開館以来編成されている全国カード総合目録 (1960年9月現在で繰込目数 359,059) および1954年以降収集したものを収録することで発刊した「新収洋書総合目録」の状況について述べている。担当責任者としての氏の永年の経験に基づいた意見が盛られている。山崎氏が引用したダウンス報告の部分も含めて、氏の結語を引用しておこう。

本館創設当時のダウンス報告は、こう書いている。「総合目録編さんが進捗するのは、一にこの仕事に適当な人員を得られるか否かによるのであって、現在の国立国会図書館の陣容では、その余力はないのであるから、この総合目録課のためには、最初少くとも25名の助手並びに1名の監督で発足することが示唆される。総合目録の仕事が展開され、その利用が増加するに従い、漸次陣容も強化する必要がある。」最小限これだけの人員を従事させなければ、旧蔵書を含めた全国総合目録を建設することはむつかしいだろうと説いているのだ。しかもこの旧蔵書とて、「手始めとしては、組織的に包括すべき図書館の数を限定し、計画を実行可能な範囲に止むべきであろう。」と述べているぐらいなのだから。

…まずこれらの旧蔵書のカード [総合] 目録を、漸次日本全国に及ぼして、その充実を図ってゆかなければならない。それが遅れれば遅れるほど、日本の学界は、調査研究に時間と労力の空費を重ねなければならないのだから。

日本における相互貸借は、まだ活発でないようである。それは総合目録が発達していないためからきている。もし全国総合目録が成長して、充分利用されるようになれば、各館は自然と他館との関係を認識して、たがいに便宜をはかることを考慮するようになるだろう。全国総合目録は、相互貸借を促進する酵母の役割をはたすに違いない。さらに、それは現在西欧諸国やアメリカが熱心に行なっているよ

うに、計画的な購入計画を、呼び起す素地を作ってゆくだらう。全国総合目録が大きく成長しないのを見て、すぐ人は、日本は経済力が劣っている国だから無理もない、とあきらめ易い。しかし、もし経済力が西欧諸国よりも劣っているなら、一そう相互貸借や計画購入によって冗費を省き、小さい図書資源を、もっと有効に幾倍にも増大して活用すべきであらう。…<sup>21)</sup>

山崎論文は論旨が明快であり、22ほどの文献が参照されているので、是非原文を読むようすすめたいが、原文を入手し得ない読者のために、氏の論文から英・独・米における事情を紹介しておきたい。

英国には全国総合目録 (*National Union Catalog* 約80万記入)がある上に、*Outlier Union Catalog* (外廓総合目録と訳してある。約40万記入)が編成されている。両者とも国立中央図書館にあるが、前者は正式の図書館組織網に属する公共図書館の蔵書を対象としたもので、後者はそれ以外の大学図書館・専門図書館の蔵書を対象としたものである。大学・専門図書館は各グループ内では相互貸借を行っていたが、公共図書館との間に相互貸借を公式に行なうことに対してはかなり批判的であった。しかしながら、第二次大戦後は積極的な協力体制が作り出されたそうである。

両総合目録とも全国書誌である *British National Bibliography* に記載されている図書は採録しないことを1958年に決定している。

雑誌の総合目録としては、Aslib (英国専門図書館協議会)が1944年に着手し、1955-58にかけて刊行した *British Union-Catalogue of Periodicals* (4冊、14万記入)がある。

ドイツは連邦制であるため (現在はしかも東西に分れている)、全国総合目録はカード形式では存在していなかった。1891年から Berghoeffer により個人的に始められたフランクフルト総合目録は、収録されている図書が大戦の災禍によって大部分失われたため、今日ではその利用価値が減少している。

印刷冊子形式の総合目録としては、1895年に計画し、1931年に第1巻を刊行したプロンツァ総合目録 (第9巻Bの部からは参加館を拡大し、ドイツ総合目録と改称)があるが、これも1939年に第14巻で中絶してしまった。

しかし戦後は、ドイツの伝統的な不屈の精神がよみがえり、目覚ましい活躍が行なわれている。「外国図書総合

目録」(ZKA)が1951年に4分冊で発行され、それ以降収集の外国図書については、補充の総合目録が月刊で発行されている。1958年現在の参加館は80館、購入予約館は120館である。予約館のうち、ハンブルグ、ケルン、フランクフルトの3館は、切り貼りによってカード目録を作っているため、3部だけは特に片面刷りにしていると聞く。いかにも無駄を嫌うドイツ人らしい。

山崎、西沢両氏の紹介には見られないが、ミュンヘンにあるババリア州立図書館の実験は紹介しておく価値があろう。1933年および1934年にとった統計によれば、1800年以前の刊行の図書に対する請求は7%にすぎなかったという。またベルンにあるスイスの総合目録について1953年後半期にとった統計からも、6~7%というデータが出されている。そしてこのことが、1800年以前刊行の資料が西独ケルンの総合目録から除外された背景となっているといえよう。ハンブルグの場合には、自然科学・医学・工学関係は1929年以後刊行のもの、法律・政治関係は1900年以後刊行のもの、人文系統のものは1800年以後刊行のもののみを収録している。<sup>22)</sup>

Walter Bauhuis<sup>23)</sup>はこのような方針に強く反対しているが、西独の実状を考慮に入れるならば、やむをえぬ解決策といえよう。

6年前図書館雑誌に掲載された拙稿では、総合目録のサイズの限界という問題に触れておいた。この問題に対する答は出さなかった。ただ、アメリカの議会図書館では1952年以降刊行の図書のカードは別ファイルにしたりしたという事実が一つの傾向を示すのではなからうか、と指摘しておいたにすぎない。

今日に至っても、筆者は、明確な一線を画するという意味では何らの解答も持っていない。しかしながら、Brummel がいったように、「1935年に J.H.P. Pafford が *Library Co-operation in Europe* で指摘した危険は60年代の今日にもなお存在している」ということは確かである。換言すれば、「目録というものは、それを扱う人員の増えかたよりも早く成長するものである」ということである。Pafford の言葉を借りれば、「目録という道具は成長の非常に早いものであり、それを扱う人々は、その成長をあれよあれよと見守るばかりで、何もなすことなく、ついにはその道具の奴隷のようなものになりかねない。〔見守る、という訳しかたは少し良すぎるかもしれない。とにかく、成長に寄与することなく、野放図に大きくなるのを手をこまねいて見るばかり、という意味である。〕 利用者の要求する資料があるかどうかを調

## 総合目録の問題点(I)

べてみるのが精一杯ということになる。「この訳語「調べる」というのも、徹底的に調査するという意味にとられると、これもまた良すぎるのである。ある名辭が標目としてこの膨大な道具の中に採用されているかどうかをチェックするという意味に解して頂きたい。」資料がたまたま見つければ幸いである。しかし見つけえなかった場合はどうなるのであろうか。見つけえない場合にどう対処するかを考究し、そのようなケースを少くするような道具に総合目録を形成しなければ、総合目録は結局は無用の長物視されかねないのである。

アメリカの総合目録も、無計画に由る無駄を排除することに関しては、細心の注意を払っている。1951年1月から総合目録参加館を500に増加し、7月からは従来の議会図書館著者目録を全国総合目録として発行することになったのである。これは、英国で *British National Bibliography* に採録したものは総合目録から除外したのと同じねらいであるといえよう。計画的に事を行ない、無駄を省くという精神を、我々日本の図書館人は英・米・独の各々から学ばねばならないと思う。

西沢秀正氏の論文は、諸外国の全国総合目録の現状を紹介した後、「国立中央図書館の包括的印刷蔵書目録、全国書誌、国内図書総合目録の関係の調整」と題して次のように論じている。

つまり、如何なる国々でも、同時期の国内出版物について、全国総合目録と全国書誌、ひいては納本受託機関の国立中央図書館の蔵書目録とが、同時期に重複して編さんが実施されていない。いかに全国総合目録と全国書誌とは、その目的効用を異にするとはいえ、その収録されるものの大部分が同一であるということは、大きな重複事業である。そこで、それぞれの国の状態によって、全国総合目録に全国書誌の性格を持たせて編さんすることによって、全国書誌の編さんを省くか(米国方式)、或は図書館間の協同収書制度及び図書相互貸借制度を基盤として全国書誌を編さんすることによって、全国総合目録の機能をも果させて、全国総合目録の編さんを省略するか(英国方式)、いずれかの方法を採用していることに注目すべきであろう。<sup>24)</sup>

端的に言えば、英国は図書館員の手間を省くことに重点を置き、アメリカは利用者の手間を省き、時間を節約しようとしておこなっているようである。ドイツは館員の手間

と、さらに資料の節約を図っているようである。日本は何を重点的に合理化していくべきであろうか。ここで参考までに、アメリカの総合目録が現在の如きものに発展した経過について、ややくわしく述べてみたい。

Maurice F. Tauber とその同僚たちがいみじくも指摘しているように、「総合目録の発展が図書館間の交換計画を促進するのに役立っていることは事実である。そして以前から図書館が互に協力してきたということも事実である。その証拠として処々方々で資料の交換・交流も行なわれている。しかしその程度たるや、我々図書館員が渴望している程度には程遠いと言わねばならない。」<sup>25)</sup> というのが、1950年代初期における状況であった。そしてかかる事態に対して数々の提案、調査報告がなされた。<sup>26)~30)</sup>

ダウンズはリソース(図書資源と訳されている場合が多い)という言葉をもととして研究用文献の意味で用いているが、図書館協力の見地から、関連しそうな諸問題をとり出し、アメリカの現状とにらみあわせ、各種の調査・研究が必要なことを力説している。たとえば、生産された図書・資料の数、図書ならびに他の図書館資料の共同受入、主題特殊化の企画、書誌センター、総合目録、総合リスト、地域毎での保存センター等々についていかなる研究・調査をなすべきかについても論じている。<sup>31)</sup>

これらの要求・提案に呼応して、議会図書館は何を行なったであろうか。責任者 G. A. Schwegmann の報告を見てみよう。

先述した如く、アメリカの議会図書館は、1956年以後刊行の図書について印刷冊子目録を公刊することに踏み切った。しかしながら、その基となるカード形式の全国総合目録は勿論残して維持することになった。ただし、ファイルは一つではなく、時代によって二つのファイルに水平分割したのである。第二ファイル、すなわち補遺(Supplements)の方に新しいものを繰り込んでいくのは、冊子体総合目録公刊の便宜を考えてのことなのか、あるいはカード形式目録の大きさに限界を感じてのことなのか、おそらくはその両方であろうと思うが、今ここでそれを論ずるのは本意ではない。筆者はSchwegmannが「未解決の諸点」としてあげているものが何であるかを示しておきたい。

全国カード総合目録の本体、すなわち1955年以前のものまで遡及して冊子目録を公刊してはという声もあるが、1300万もの記入を持ち、永年の間に累積されたもの

を公刊するには大変な準備(記入統一上の調整, 編集等)が必要である。

スラヴィック, ヘブライ, 日本語, 中国語等ローマ字以外の図書の総合目録はどうすべきか, も未解決の諸点の一つである。

雑誌・逐次刊行物の包括的, 週及の全国総合目録(カード形式)もさらに改善・拡大しなければならない。非図書資料, たとえば音盤, マイクロカード等の総合目録は如何にすべきか。

以上に列挙した諸点は, 著者が判明している場合の探索手段としての総合目録に関したものであるが, 主題による探索の手段としても総合目録的なものが考えられるのではないか。この点について, Schwegmann は 1950 年から議会図書館が刊行している件名目録 (*Subject Catalog*) に期待を寄せている。

議会図書館のカード形式全国総合目録の本目録は, 同館年報によると, 1961年6月末現在でカード数1294万, 補遺目録152万, スラヴ語文献総合目録44万, ヘブライ語10万, 日本語12万, 中国語5万という状況にある。この総合目録に対して年間2万8千件の質問を受け, そのうち資料を発見できなかったのは5,900件, 21%であったという。

Swegmann が次の10年間として論じた期間の最初の5年間の成長過程は議会図書館の弘報によって窺うことができるが, それについては本論において触れるつもりである。

3. 日本の総合目録 図書館史の一頁を飾るにふさわしい藤原佐世の「日本国見在書目録」を過去に持ち, また冒頭に引用した「総合目録オンパレード」が皮肉ったように多くの企画がたてられたにもかかわらず, わが国の総合目録は多くはないようである。すくなくとも, 良く利用されているものはあまりないといえよう。黒岩論文によれば, 総合目録を所有しない館, 所有はしていても利用しない館が相当ある。(これについては本論問題点でも触れるつもりである)

西沢秀正氏は「戦後編さん刊行の総合目録について——紹介と批評」<sup>89)</sup>において51種の総合目録を7つのカテゴリーに分けて紹介している。そのうちカード形式をとっているのは国立国会図書館編さん維持の「全国総合カード目録」と「一橋大学・神戸大学・大阪市立大学・新収洋書カード目録」(昭和29年以降のものにつき準備中)の2つだけである。専門図書館協議会関東地区協議会・経済分科会の「海外逐次刊行物総合目録」と「関東

地区所在医学図書館所蔵欧州医学雑誌カード目録」が発足はしたが, 前者は1958年にB5版55頁の印刷冊子総合目録を発行したのを機に冊子体に切りかえられ, 後者は参加館からのカード送付がスムーズに行なわれず, 約5000枚でストップしてしまっている, と西沢氏は報告している。そしてそのことから, 「総合目録をカード・システムとして編成維持することは, それ相当の覚悟と用意が必要である」と氏は述べている。

西沢氏が紹介している他の総合目録はいずれも冊子形式である。いずれにせよ, 氏の紹介した総合目録のリストには網羅的であり, このような紹介は, 国立国会図書館の如く資料の集中する中央図書館, しかもその資料収集部門に勤務する西沢氏の如き人でなければなしえないものである。

西沢論文が発表された後, 昭和32年に同館の職員をも含めた9名のチームワークによって「日本の参考図書」が編集されたが, 同書に収録された総合目録の若干を次に掲げてみよう。各記入の後に, 同書が使用している識別番号を( )内に示しておく。

- 南方史研究会 欧文インド文献総合目録 社会科学・人文科学編 昭和 34 (A 67)  
 小竹文夫 近百年來中国文文献現在書目 東方学会 昭和 32 838 p. (騰) (A 72)  
 近代中国研究委員会 中国文新聞雑誌総合目録 市古宙三編 昭和 34 171 p. (B 41)  
 私立大学図書館協会 図書館学関係外国雑誌総合リスト 昭和 35 23 p. (騰) (B 46 a)  
 基督教史学会 日本基督教史関係と漢書目録 1590-1890 昭和 29 129 p. (D 167)  
 池坊学園短期大学図書館 華道文献目録 昭和 32 110 p. (E 179)  
 文部省学術文献総合目録分科審議会 言語学文献総合目録草案 昭和 25 156 p. (F 1)  
 石川松太郎 教育史に関する文献目録並に解題 昭和 28 242 p. (P 1)

以上に列挙したものの中には, 総合目録としてよりは書誌として使われるものもあるが, 筆者は所蔵機関が2以上にわたって明記してあるという意味で総合目録とみなした。その意味では, 次のものも総合目録としてあげべきかもしれない。

慶応義塾大学文化地理研究会 世界国別地誌目録 昭

## 総合目録の問題点(I)

和 34 552 p. (H 201)

英 修道 日本外交史関係文献目録 昭和 36 485 p.  
(K 1)

このうち、前者は国立国会図書館、慶応義塾図書館、日比谷図書館、西岡秀雄所蔵の資料にのみ所蔵者名を記載しているが、後者は、写本類に限って所蔵者が判明している場合には所蔵館名または所蔵者名を記入している。

非図書資料についても所有者名を記しているものが多い。たとえば次のようなものである。

文化財保護委員会 指定文化財総合目録 昭和 33  
3 冊 (E 40)

上野直昭・坂本万七 日本彫刻図録 昭和 32 図版  
144 70, 95 p. (E 47)

木村小舟 新修日本仏像図説 昭和 27 433 p. (E49)

所有者・所蔵館は明記せずとも容易に想定し得るものは、書誌であっても、総合目録と同様に活用できるわけであるが、それまであげるのは筆者の良くなし得ることではない。しかしながら、折角調査の際に確認しておきながら、未確認のものが多いため、編集方針として所蔵館を明記しなかったのではなかろうか、と思われるものをあげておこう。たとえ一部分だけでも所蔵館が明記されていたなら、その利用価値は増したであろうに、と惜しまれてならない。

近藤慈恩 日本医・歯・薬学雑誌総覧 1958年版 昭和 33 501 p. (U 5)

岡田弥一郎・松原喜代松 日本産魚類文献目録 1612-1950 昭和 28 282 p. (S 101)

坂本武雄 日本水産文献集成 自明治元年至昭和20年 昭和 27 10 冊 (騰) (T 198)

それから、非常に特殊なものであり、雑誌に発表されたものであるが、日本におけるインキュネビュラの総合目録がある。これは天野敬太郎氏がアンケートを送った150館のうち、一橋大学、京都大学、天理大学、東京大学、東洋文庫、上野図書館から寄せられた回答を基にして、同氏が図書館界14号(1952)に発表したものである。タイトル数は多くなく、abc順によらず、1473-1500年迄の年代順に配列されている。

日本の戦後における総合目録の今一つの例として次のものを紹介しておきたい。これは種々の問題を含んでお

り、本論でもとりあげるつもりである。

全国薬学図書館所蔵学術雑誌総合目録 化学・薬学・  
関連医理工学領域 欧文編 1961 69 p.

これは薬学関係29大学31館および製薬会社関係12館の所蔵する730種の雑誌ならびに雑誌索引の総合目録である。編集者の前書きによれば、武田薬品工業株式会社研究所図書館は非公開である。にもかかわらず、その所蔵雑誌をこの総合冊子目録に収録したのは大きな貢献であると思う。730種のうち、武田のみが所蔵する雑誌は57種であり、同種雑誌は他の42館のいずれかが所蔵しているが、その特定の号が武田のみに所蔵されているのが98種に及んでいる。勿論この総合目録に参加していない医学・化学・工業関係図書館には同種のものもあろうが、40機関42館の利用者にとって、武田の厄介にならない雑誌が57種プラス98種、計155種もあるということは大きな問題である。念のため記しておくが、武田が所蔵する学術雑誌で同日録に採録されているのは270種程度である。

なお、戦前の総合目録で、筆者が今日でもその恩恵にあずかっているものがいくつかある。いずれも印刷冊子目録であるが、思いつくままに挙げておく。

太平洋協会 南洋文献目録 昭和 16 173 p. (A 65)

外国学術雑誌目録 大正十年末現在 (*Catalogue of Foreign Scientific Serial Publications in the Various Institutions in Japan*) 学術研究会議編刊 大正13年2版 274 p. [3,142部, 376館参加]

——— 昭和8年末現在 昭和 13 825 p.

大学専門高等諸学校備付外国逐次刊行誌合同目録 間宮不二雄 (図書館研究 第1巻2号—第2巻1号 所載)

文部省管轄帝国大学農学部並農学関係専門学校外国学術雑誌総合目録 鳥取高等農林学校編刊 昭和10 192 p.

医科大学附属図書館協議会 医科大学共同雑誌目録第三版 新潟医科大学附属図書館刊 昭和 17 552 p. (これを継承するものが、日本医学図書館協会の医学雑誌総合目録 欧文雑誌編 第4版 昭和 36 420 p. である)

図書館及び書誌学関係文献合同目録 青年図書館員連盟編 昭和 13

以上がその主要なものである。

次号に掲載予定の本論においては、カード形式総合目録編成上調整を要する3問題(カードサイズ, 目録規則, 資料採用方針)および編成に当って生ずる問題(方式, 経費, 排列規則等)を説明し, 次に印刷冊子形式の総合目録の場合におけるそれとを比較検討する予定である。

なお, 全国書誌と大図書館の蔵書目録との関係, 主題書誌と主題総合目録の場合における主題分散度の関連なども論じていく予定である。

さらに, 序論において紹介した総合目録のうち, 特に日本のものをとりあげて, 重複度その他を計算し, 今後の総合目録作成企画担当者に参考データを提供したいと思う。(図書館学科)

- 1) 中村初雄. "総合目録について——共同調査を初めるまで——," 図書館雑誌, vol. 51 (no. 3), 1957. 3, p. 95-97 (15-17).
- 2) 小田泰正. "総合目録の問題をめぐって," 図書館雑誌, vol. 51 (no. 8), 1957. 8, p. 384-387 (2-5).
- 3) 西沢秀正. "全国総合目録の編さんについて," 図書館雑誌, vol. 51 (no. 6), 1957. 6, p. 228-233 (4-9).
- 4) 杵掛伊佐吉. "総合目録について," 図書館雑誌, vol. 54 (no. 6), 1960. 6, p. 178-179.
- 5) 黒岩高明. "総合目録の利用に関する研究," 図書館研究, 復刊 no. 4, 1959. 6, p. 1-26.
- 6) 杵掛, *op. cit.*, p. 179.
- 7) Wolk, L. J. van der. "The function of telex in the union catalogue," *Libri*, vol. 11 (no. 4), 1961, p. 377-391.
- 8) Jewett, Charles C. A plan for stereotyping catalogues by separate titles..., in American Association for the Advancement of Science. *Proceedings...* Washington, S. F. Baird, 1851. vol. 4, p. 165-176.
- 9) Norris, Dorothy M. *A history of cataloguing and cataloguing methods*. London, Grafton, 1939. p. 30-34.
- 10) *Ibid.*, p. 77-78, 117.
- 11) Thompson, James W. *The medieval library*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1939. p. 168 ではフランシスコ会派にしているが, 筆者は Norris に従う。Boyer, Blanche B. "The medieval library (review)," *Library quarterly*, vol. 10 (no. 3), Jul. 1940, p. 401-402 で指摘されているように, 同書にはこまかいミスが相当ある。
- 12) Unesco, and Library of Congress. Bibliographical survey. *Bibliographical services; their present state and possibilities of improvement...* Appendix: Notes on the development of the concept of current complete national bibliography [from 1844 to 1939] by Katharine Oliver Murra. Paris, Unesco, 1950. 42 p.
- 13) Unesco, and Library of Congress. Bibliographical survey. 書誌サーヴイス, [*Bibliographical services...*], 国立国会図書館受入整理部訳. 東京 [国立国会図書館, 1950] p. 6, 8.
- 14) Preliminary report of the Committee on a General Catalogue of English Literature, in Library Association of the United Kingdom, *Transactions and proceedings...* First annual meeting... Oxford, 1878. p. 8.
- 15) ある著名な図書館長に, その友人がスロット・マシン (日本のパチンコに相当するもの) の構造と原理を懸命に説明したが通じなかった。最後に「それは何のために用いる機械なのか」と質問され, 「暇潰しにやる一種の賭博のためのものだ」と答えたところ, 即座に了解したという有名なエピソードがある。
- 16) 黒岩, *op. cit.*, p. 1-2.
- 17) Downs, Robert B. *National Diet Library...* Tokyo, Kokuritsu Kokkai Toshokan, 1948. p. 18-19.
- 18) ユニーク・タイトルの比率の他に, Index of inclusiveness (含有係数——当該図書館が総合目録に参加している各他館の所蔵タイトルの何%を所蔵しているかの平均値) から Index of duplication (重複係数——当該図書館所蔵タイトルの%何が各他館にも所蔵されているかの平均値) を差し引いた数値を, 総合目録参加館としての当該図書館の蔵書の評価に用いることがある。この数値は正の場合も負の場合もあることはいうまでもない。他の条件がほぼ等しい場合, この差はユニーク・タイトルの比が大であれば大となり, 蔵書の特徴を象徴するものと考えられている。筆者はその使用を好まないが, 評価の手がかりの一つとはなろう。この差は Index of distinctiveness と呼ばれている。
- 19) Brummel, L., and Egger, E. *Guide to union catalogue and international loan centers*. The Hague, M. Nijhoff, 1961. p. 89.
- 20) 現在は武蔵大学図書館に転出。
- 21) 山崎武雄. 欧米の全国総合目録と本館。〈国立国会図書館・図書館研究シリーズ, no. 3. 東京, 1960〉 p. 41-54.
- 22) Brummel, L. *Union catalogue; their problems and organization*. [Paris] Unesco [1956] p. 40-41.
- 23) Bauhuis, Walter. "Zentralkataloge," *Zentr-*

総合目録の問題点(Ⅰ)

- abblatt für Bibliothekswesen*, vol. 67 (no. 3/4), Mar./Apr. 1953, p. 90-93.
- 24) 西沢秀正. 全国総合目録と他の全国的書誌活動との関係について. <国立国会図書館. 研究シリーズ. no. 3. 東京, 1960> p. 67.
- 25) Tauber, Maurice F., et al. *Technical services in libraries*. New York, Columbia Univ. Press, 1953. p. 108.
- 26) Leet, Herbert L., and Johnson, George H. "Creating a union list," *Library journal*, vol. 80 (no. 19), Nov. 1, 1955, p. 2423-2426.
- 27) Brown, Helen F. "The proposal from the college library viewpoint," *College and research libraries*, vol. 17 (no. 1), Jan. 1956, p. 34-36.
- 28) David, Charles W. "Proposed expansion of the *Library of Congress Catalog...Books: Authors* into a current national union catalog, 1956; background and significance of the proposal," *College and research libraries*, vol. 17 (no. 1), Jan. 1956, p. 24-28.
- 29) Metcalf, Keyes D., and Osborn, Andrew D. "Proposal for publishing the National Union Catalog," *College and research libraries*, vol. 17 (no. 1), Jan. 1956, p. 36-40.
- 30) Campion, Eleanor E. "Existing bibliographical resources; dead end, detour, or freeway?" *American documentation*, vol. 7 (no. 2), Apr. 1956, p. 83-86.
- 31) Downs, Robert B. "Research in problems of resources," *Library trends*, vol. 6 (no. 2), Oct. 1957, p. 147-159.
- 32) Schwegmann, George A. Jr. "The national union catalog in the next decade...some unsolved problems," *Library resources and technical services*, vol. 1 (no. 4), Fall 1957, p. 159-165.
- 33) 西沢秀正. "戦後編さん刊行の総合目録について——紹介と批評——," *図書館雑誌*, vol. 54 (no. 6), 1960. 6, p. 180-183.